尾形光琳『燕子花屏風』の光源

①『伊勢物語』第九段

むかし男ありけり　その男　身を要なきものに思ひなして　京にはあらじ　東(あずま)のかたに住むべき国求めに　とていきけり　道知れる人もなくてまどひいきけり　三河の国　八橋(やつはし)といふところにいたりぬ　そこを八橋といひけるは　水ゆく河のくもでなれば　橋を八つわたせるによりてなむ　八橋といひける　その澤(さわ)のほとりの木のかげに下(お)り居て　かれいひ(乾飯)食ひけり　その澤にかきつばたいとおもしろく咲きたり　それを見て　ある人のいはく　かきつばたといふ五文字(いつもじ)を句のかみにすゑて旅の心をよめといけひれば　よめる

唐衣きつつなれにし妻(褄)しあれば　はるばるきぬ(来/着)る旅をしぞ思ふ

とよめりければ　みな人かれいひの上に涙落してほとび(潤)にけり（以下略）

②謡曲『杜若』

（ワキ）これは諸国一見の僧にて候　われこの間(あいだ)は都に候ひて洛陽の名所旧跡残りなく一見仕りて候　またこれより東国行脚と心ざし候

夕べ夕べの仮枕　夕べ夕べの仮枕　宿はあまたに変はれども　同じ憂き寝のみのをはり　三河の国につきにけり

急ぎ候間　程なう三河の国に着きて候　またこれなる沢辺に杜若の今を盛りと見えて候　立ち寄り眺めばやと思ひ候

げにや光陰とどまらず春過ぎ夏も来て　草木心なしとは申せども　時を忘れぬ花の色貌吉花(かおよばな)とも申すらん　あら美しき杜若やな

（シテ）のうのうおん僧　なにしにその沢には休らひ給ひ候ぞ　（ワキ）これは諸国一見の者にて候　さてここをばいずくと申し候ぞ　（シテ）これこそ三河の国八橋とて杜若の名所にて候へ　さすがにこの杜若は　名に負ふ花の名所(などころ)なれば　色もひとしほ

こむらさきの　なべての花のゆかりとも思ひなぞらへ給はずして　とりわき眺め給へかし　あら心なの旅人やな　（ワキ）げにげに三河の国の八橋の杜若は　古歌にも詠まれけるとなり　いづれの歌人の言の葉やらん　承りたくこそ候へ　（シテ）伊勢物語に曰はく　ここを八橋と言ひけるは　水行く川の蜘蛛手なれば橋を八つ渡せるなりその沢に杜若の意図面白く咲き乱れたるを　ある人かきつばたといふ五文字を句の上に置きて旅の心を詠めと言ひければ　唐衣きつつ慣れにしつましあれば　はるばるきぬるたびをしぞ思ふ　これ在原の業平の　この杜若を詠みし歌なり

（ワキ）あら面白きやさてはこの東の果ての国までも　業平は下り給ひけるか　（シテ）事新しき問ひごとかな　この八橋のここのみか　なほしも心の奥深き　名所名所の道すがら（ワキ）国々所は多けれども　とりわき心の末かけて　（シテ）思ひわたりし八橋の　（ワキ）三河の沢の杜若　（シテ）はるばる来ぬる旅をしぞ　（ワキ）思ひの色を世に残して　（シテ）主は昔になりひらなれども　（ワキ）形見の花は　（シテ）いまここに

（地）ありはらの　跡な隔てそかきつばた　跡な隔てそ杜若　沢辺の水の浅からず　契りし人も八橋の　蜘蛛手に物ぞ思はるる　今とても旅人に　昔を語る今日の暮　やがて慣れぬる心かな　やがて慣れぬる心かな

（シテ）いかに申すべきことの候　（ワキ）なにごとにて候ふぞ　（シテ）見苦しく候へども　わらはの庵にて一夜をおん明かし候へ　（ワキ）あら嬉しや　やがて参り候べし

【物着あしらい】シテは初冠と長絹をつける。

（シテ）のうのうこの冠唐衣をご覧候へ　（ワキ）不思議やな賤しき賤の臥所より色も輝く衣を着　透額の冠を着し　これ見よと承る　こはそもいかなる事にて候ぞ

（シテ）これこそこの歌に詠まれたる唐衣　高子の后の御衣にて候へ　またこの冠は業平の　豊の明の五節の舞の冠なれば　形見の冠唐衣　身に添え持ちて候ふなり

（ワキ）冠唐衣はまづまづ措きぬ　さてさておん身はいかなる人ぞ　（シテ）まことはわれは杜若の精なり　植え置きし昔の宿の杜若と　詠みしも女の杜若に　なりし謂は

れの言葉なり　また業平は極楽の　歌舞の菩薩の仮現なれば　詠み置く和歌の言の葉までも　みな法身説法の妙文なれば　草木までも露の恵みの　仏果の縁を弔らふなり

（ワキ）これは末世の奇特かな　正しき非情の草木に　言葉を交はす法の声　（シテ）仏事をなすや業平の　昔男の舞の姿　（ワキ）これぞすなはち歌舞の菩薩の　（シテ）仮りに衆生となりひらの　本地寂光の都を出でて　（シテ）普く済度　（ワキ）利生の　（シテ）道に

（地）はるばる来ぬる唐衣　はるばるきぬる唐衣　着つつや舞を奏づらん

（シテ）別れ来し　あとのうらみの唐衣　（地）袖を都に返さばや

【イロエ】［舞台をひと回りする短い舞］

（シテ）　そもそもこの物語はいかなる人の何事によって

（地）思ひの露の信夫山　忍びて通ふ道芝の　はじめもなく終りもなし

（シテ）昔初冠して奈良の京　春日の里にしるよししてかりに往にけり　（地）仁明天皇の御宇とかよ　いとも畏き勅を受けて　大内山の春霞　立つや弥生の初めつ方春日に祭りの勅使として透額の冠を許さる　（シテ）君の恵みの深きゆゑ　（地）殿上にての元服のこと　当時その例稀なるゆゑに　初冠とは申すとかや

（地）しかれども世の中の　ひとたびは栄え　ひとたびは　衰ふ理の　真なりける身の行方　住み所求むとて　東の方に行く雲の　いせや尾張の海面に　立つ波を見て　いとどしく　過ぎにし方の恋しきに　うらやましくも　かへる波かなと　うち眺め行けば信濃なる　浅間の嶽なれや　くゆる煙の夕景色　（シテ）さてこそ信濃なる浅間の嶽に立つ煙　（地）遠近人の　見やはとがめぬと口ずさみ　なほはるばるの旅衣三河の国に着きしかば　ここぞ名にある八橋の　沢辺に匂ふ杜若　花紫のゆかりなれば　妻しあるやと　思ひぞ出づる都人　しかるにこの物語　その品多きことながらとりわきこの八橋や　三河の水の底ひなく　契りし人びとの数かずに　名を変へ品を変へて　人待つ女　物病み玉簾の光も乱れて飛ぶ蛍の　雲の上まで往ぬべくは　秋風吹くと　かりに現はれ　衆生済度のわれぞとは　知るや否や世の人の　（シテ）暗きに行かぬ有明の　（地）光普き月やあらぬ　春や昔の春ならぬ　我が身ひとつは　もと

の身にして　本覚真如の身を分け　陰陽の神と言はれしも　ただ業平のことぞかし
かやうに申す物語　疑はせ給ふな旅人　はるばるきぬる唐衣　着つつや舞を奏づらん
（シテ）花前に蝶舞ふ紛々たる雪　（地）柳上に鶯飛ぶ片々たる金

【序の舞】

（シテ）植え置きし　昔の宿の杜若　（地）色ばかりこそ　昔なりけれ　色ばかりこそ
昔なりけれ　色ばかりこそ
（シテ）昔男の名を留めて　花橘の　匂ひうつる　菖蒲の鬘の　（地）色はいづれ　似
たりや似たり　杜若花菖蒲　こずゑに鳴くは　蟬のからころも
（地）袖白妙の　卯の花の雪の　夜もしらしらと　明くる東雲の　あさむらさきの　杜
若の　花も悟りの　心ひらけて　すはや今こそ　草木国土　すはや今こそ　悉皆成仏
の　御法を得てこそ　失せにけれ

参考　二つの日本の文体（『伊勢物語』との対比）

『源氏物語　須磨の巻』より

須磨にはいとど心づくしの秋風に　海は少し遠けれど　行平の中納言の関吹き越ゆると言いけむ浦波　よるよるはいと近くに聞えて　またなくあはれなるものは　かかる所の秋風なり　御前いと人少なにて　うち休みわたれるに　ひとり目を覚して枕をそばだてて　四方の嵐を聞き給ふに　波ただここもと立ち来る心地して　涙落つともおぼえぬに　枕浮くばかりになりにけり　琴を少しかき鳴らし給へるが　我ながらいとすごう聞こゆれば　弾きさし給ひて

　恋わびて泣く音にまごふ浦波は　思ふ方より風やふくらむ

とうたひ給へるに　人びとおどろきてめでたうおぼゆるに　忍ばれで　あいなう起き居つつ　鼻をしのびやかにかみわたす

…